

もくじ	
P 1~2	支援員さんの声 活動団体報告
P 2~3	学識経験者寄稿
P 4	自然保護課からのお知らせ

支援員さんの声

山口県は環境学習先進地

私は「鉄子」である。つまり鉄ちゃんのおばさん版だ。JRは首都圏を残すのみ。私鉄、第三セクター線もかなり乗っている。鉄ちゃんは、撮り鉄、駅鉄などに細分化されているが、私は乗り鉄で、乗ったらただひたすら車窓を眺めている。つまり鉄道という線から見える日本の自然を観察している、と言える。

私は野生の花が大好きである。その花好きと鉄子が合体するといひ。数年前、春の青春18切符を利用して関東の鉄道に乗りに行った。乗る予定にしている両毛線沿いの佐野市にカタクリの自生地があるのを知り、そのカタクリの花に会いたくて3月末に旅のスケジュールを組んだ。

カタクリの自生地は、関東平野の北端にぽっかり浮かんでいるような三轟山みかちの北麓にあるので南麓から縦走して稜線から自生地に入った。三轟山のカタクリの自生地は、広い遊歩道が整備されていて、ロープの内側にはカタクリの花がびっしり、遊歩道には人がびっしり。そのカタクリの花の中に白い花がちらほら見え、何の花か尋ねようとガイドを探したが見つからない。ガイドを求めて下っていくと、とうとう入り口に到着してしまい、駐車場の整理をしている佐野市職員に聞いてみると、ガイドはおらず、養成する予定もないとのこと。そのとき私が思わず呟いたのは「なんともったいない」。たくさんの見学者は、「ワーキレイ」とパシャパシャ写真を撮ってそれでおしまい。



セツブンソウ

それに比べ、私がかかわっている岩国市錦町のセツブンソウ自生地では、見学者にセツブンソウの生活史や里山の大切さを私が作った紙芝居や資料で伝えている。

2年前からその紙芝居を使って、岩国高校広瀬分校の生徒たちが、セツブンソウ見学者が乗ってくる錦川清流線の臨時列車の中でセツブンソウの大切さを伝えてくれている。自生地では小学生のキッズガイドが見学者に資料を使って説明している。

これはすべて山口県に環境学習推進センターがあったからこそ。栃木県のカタクリの自生地、山口県は環境学習の先進県だということに気付いた次第です。



活動団体報告

ミツバチと環境保全

山口県養蜂農業協同組合 瀬川 高志 (美祢市在住)

ミツバチは、人間よりも遥かな古代から生息して、森に多いドングリのできる落葉広葉樹(被子植物)や、花をつけ種子を作る植物(顕花植物)などと共に生きてきたと言われています。花が咲き、蜜を出す植物は、受粉しなければ実が出来ません。実が出来ないと種が出来ないため、植物は子孫を残せないこととなります。そうすると、森がなくなるということになります。

養蜂農業協同組合に所属して環境パートナー活動をされている方に、団体の取組を紹介していただきました。ありがとうございました。

森がなくなるといったことはどういうことか？多くの昆虫が減り、鳥や熊や鹿、リス、イノシシをはじめ多くの生物が棲めなくなります。山そのものの植性が偏り、山崩れが常時化、荒廃すると考えられます。そして、川に含まれる栄養も大きく失われます。

山に降った雨は浄化され、木々や土壌のミネラルや鉱物などの成分を含み、土石、枯れ木、落葉、虫などとともに川に流れます。川は、山からの豊かさを束ねながら下流へと向かいます。豊かな川は、魚や無数の動植物を養いながら下り海へ流れ込みます。最後に、海に流れ込んだ栄養豊かな水は、プランクトンの餌や、海草の栄養分として運びこまれ、豊かな海を創る役割を果たしています。

このように落葉広葉樹や顕花植物が育つ山から流れ出た栄養豊かな水は、多くの生命体を育む環境となっているのです。

「ハチ」→「受粉」→「結実」→「種」→「植物の増殖」・・・という相互循環は、山から川、海へと影響しているのです。

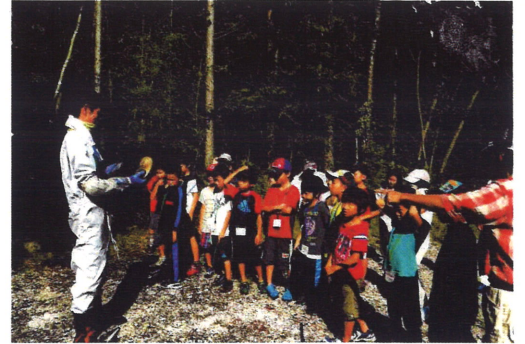
また、森は多様な生命体を育むだけでなく二酸化炭素を吸収し、気温や湿度を調節する気候緩和機能や水の浄化、多量の水を蓄えるダムの役割など様々な働きをしています。

山野の自然を守っていた「ミツバチ」の見えない力に気づき始めている人は、まだまだ少数です。「ミツバチ」を守り増やすことは、環境破壊的行為を慎み、豊かな自然環境を取り戻すこととなります。

自然環境の大切さ、集団生活の大切さ、ミツバチから学ぶことはたくさんあります。

私は、山口市小郡桂谷にある「里乃駅 ランプの宿」に蜂箱を置き、将来を担う子供たちや訪問された人たちに、実際にミツバチに触れてもらい、ミツバチの生態や自然環境についての話をしています。

ハチも人類も自然の一部です。新米養蜂家ですが、私たちが自然の中で生かされていることを多くの人に伝えていきたいと考えています。



学識経験者寄稿

SFTSは、平成25年に山口県で国内初の患者が発見されて以降、西日本を中心に375人の患者が発生し、その内63人が死亡しています。我が国で初めてSFTSウイルスを発見した山口大学の前田教授に、支援員活動での注意などを寄稿していただきました。

重症熱性血小板症候群(SFTS)の我が国における発生状況と予防対策

山口大学共同獣医学部獣医微生物学教室 前田 健

SFTSは2011年に初めて報告された新しいマダニが運ぶウイルスによる感染症である。非常に致死率が高く、危険な感染症である。高齢者が主に病気になり、死亡する確率は30%にもおよび(図1)。主な症状として、発熱、血小板減少、白血球減少、消化器症状がある。それ以外にも、全身倦怠感、食欲不振などが多く認められる。神経症状、出血傾向、紫斑、消化管出血などが認められると死亡する可能性が高くなる。

SFTSウイルスがマダニで維持されるマダニサイクルと野生動物の血液を吸って、血液中のSFTSウイルスにマダニが感染する野生動物サイクルがある(図2)。

マダニサイクルでは一匹の雌マダニから大量の卵、幼ダニが生まれる。この雌成ダニがSFTSウイルスを保有している場合、多くの幼ダニがSFTSウイルスを保有することになる。

一方、動物サイクルにおいては、野生動物には多くのマダニが同時に咬着している。一匹の野生動物がSFTSウイルスのウイルス血症に

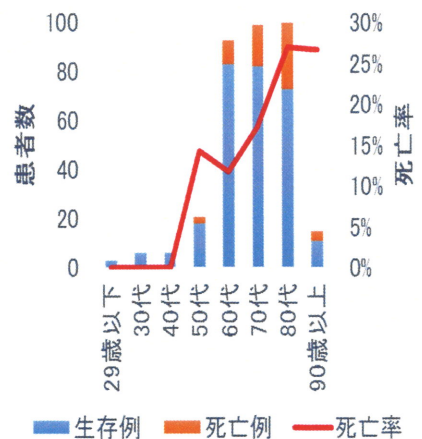


図1 年齢別のSFTS患者の比較
SFTS患者は国立感染症研究所ホームページ<https://www.niid.go.jp/niid/ja/id/2245-disease-based/sa/sfts/idsc/idwr-sokuhou/7415-sfts-nesid.html>より引用

なった場合、多くのマダニが吸血によりウイルスに感染する。このように、条件さえ整えば、マダニサイクルと動物サイクルの両方でSFTSウイルスの感染は拡大する。ヒトへの感染経路は、3種類が知られている。ウイルス保有マダニの吸血による感染、患者との濃厚接触による感染、SFTS感染動物による咬傷などの濃厚接触による感染がある。

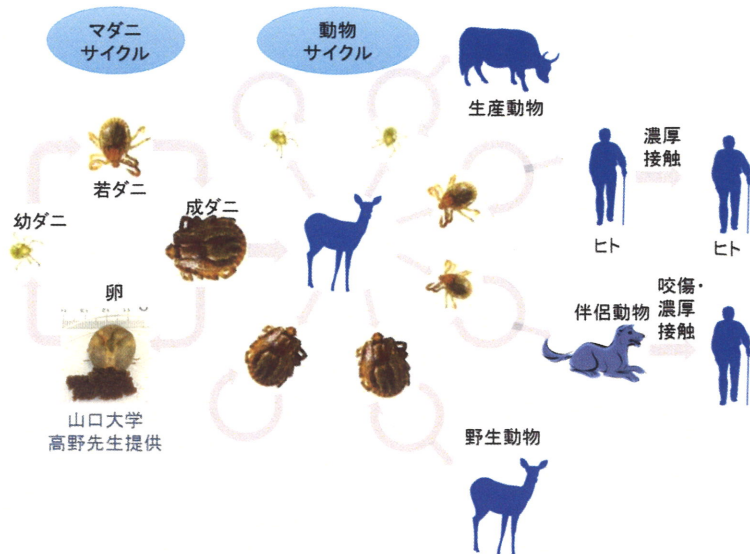


図2 重症熱性血小板減少症候群ウイルスの感染環

一般的な注意事項

- 1 高齢者は重症になる可能性が高い。しかし、若者も感染し発症する。
- 2 4 - 10月に発生が多い。しかし、一年中発生がある。
- 3 草むらに注意する。マダニは葉っぱの先で待っている。
- 4 西日本で発生が多い。しかし、東日本でも発生の可能性がある。
- 5 病気の動物との濃厚接触は避ける。ネコやイヌから感染することもある。

支援員の皆様が気をつけること (図3)

《マダニ対策》

- 1 野外活動の際は長袖・長ズボンを着用する。
- 2 DEET などが入った虫除けスプレーを使用する。
- 3 野外活動後はシャワーあるいは入浴する。
- 4 野外活動で使用した服は室内に入る前に交換する。

《マダニを見つけたら》

- 1 素手では潰さない。
- 2 ガムテープなどに付着させてから捨てる。

《マダニに噛まれたら》

- 1 慌てない！すべてのマダニが病原体を持っているわけではない。
- 2 皮膚科に行く。あるいはピンセットなどで口をもって引き抜く（あまり勧めない）。
- 3 2週間程度体温を測定し、発熱したら医者に行く。その際、マダニに咬まれたことを伝える。



図3 (山口大学共同獣医学部獣医微生物学教室作成「注意！蚊やマダニから身を守ろう」より転載)

希少野生動物種保護支援員研修会 次のおり予定しています。(詳細は開催案内を参照)

- 第1回 日時：平成30年10月28日(日)10時～15時 場所：オオサンショウウオ保護施設 他
 第2回 日時：平成31年3月3日(日)10時～15時 場所：きらら浜自然観察公園

発行元：(公財)山口県ひとつづくり財団 県民学習部 環境学習推進センター
 〒754-0893 山口市秋穂二島1062 TEL：083-987-1110 FAX：083-987-1720
 E-mail kankyo.c@hito21.jp
<http://eco.pref.yamaguchi.lg.jp/learning/>

◆「山口県レッドリスト2018」について

山口県では、絶滅のおそれのある野生動植物をとりまとめた「レッドデータブックやまぐち」の作成から10年以上が経過しており、県内の野生動植物をめぐる状況が大きく変動していることから、2015年からレッドリストの見直しを進め、本年3月、「山口県レッドリスト2018」を作成しました。

なお、現在、山口県レッドリスト2018の掲載種について解説したレッドデータブック（web版）の作成作業を進めており、今年度末を目途に公開する予定です。

山口県レッドリスト2018

○ レッドリストとは…

山口県内に生息・生育する野生生物について、専門家が生物学的観点から種の絶滅の危険度を科学的・客観的に評価したリストで、レッドデータブックの基礎データです。

○ 「山口県レッドリスト2018」掲載種数

(単位：種)

絶滅 (EX)	野生 絶滅 (EW)	絶滅のおそれのある種				準絶滅 危惧 (NT)	情報 不足 (DD)	合計	絶滅の恐れのある 地域個体群 (LP)
		絶滅危惧Ⅰ類			絶滅危惧 Ⅱ類 (VU)				
		ⅠA類 (CR)	ⅠB類 (EN)	Ⅰ類 (CR+EN)					
20 (3)	— (—)	369 (316)	172 (83)	6 (28)	308 (313)	253 (237)	342 (95)	1,470 (1,075)	— (1群)

※()内は、レッドデータブックやまぐち(2002, 貝類 2003)の掲載種数

【参考】山口県レッドリスト2018

注目される種のカテゴリー（ランク）とその変更理由

ほ乳類 ツキノワグマ (旧)絶滅危惧ⅠA類 ↘ (新)絶滅危惧Ⅱ類

かつては、県東部の山間部を中心に生息していましたが、近年では県西部での目撃情報が増加するなど分布が拡大傾向にあります。また、5年毎の調査による推定生息頭数は、2004-2005年から2009-2010年にかけて増加し、その後も安定傾向にあることから、絶滅危惧ⅠA類からⅡ類にランクダウンとなりました。



提供：田戸裕之 (2015.6.28 撮影)

鳥類 タンチョウ (旧)絶滅 ↘ (新)絶滅危惧ⅠA類

大正時代を最後に県内への飛来はなく絶滅とされていましたが、2007年11月に山口市名田島に幼鳥1羽が飛来しました。当個体は暫く逗留し越冬も確認されたため、絶滅から絶滅危惧ⅠA類となりました。



提供：原田量介 (2007.11.26 撮影)

は虫類 ニホンイシガメ (旧)準絶滅危惧 ↗ (新)絶滅危惧Ⅱ類

本県では、おもに山村部の小河川や溜池に生息し、その周辺の水田に移動して餌を捕食したり、畑に産卵したりして生活しています。前回調査に比べ、個体数が減少し、新たな生息域がほとんど確認できませんでした。

減少の要因は、生息域の水田や畑、溜池の減少、河川工事等の影響が考えられ、今回、準絶滅危惧から絶滅危惧Ⅱ類にランクアップとなりました。



提供：徳本 正 (2010.5.22 撮影)

昆虫類 ギフチョウ (旧)絶滅危惧Ⅱ類 ↗ (新)絶滅危惧ⅠA類

本県が分布の西端となり、四国や九州は分布しません。1990年初頭までは県内に広く分布していたが、2000年以降、急速に分布域を狭めました。減少の要因は、環境変化による植生遷移と採集圧が大きく影響しており、ここまで急激に減少した蝶類は少なく、絶滅危惧Ⅱ類からⅠA類にランクアップとなりました。



提供：後藤和夫 (2017.4.13 撮影)

- リストの詳細は、県自然保護課のホームページに掲載しています。

「山口県レッドリスト2018」

【URL】 <http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a15600/redlist/redlist2018.html>